

下訳者あとがき

本書は宮崎広和さんの単著 *Arbitraging Japan: Dreams of capitalism at the end of finance* (University of California Press, 2013) をもとにした著作である。2016年2月、京都で宮崎さんに木村がお会いした際、いくつかの話題とともに本書の日本語での出版の話が出た。本書の議論に強い関心をもっていた木村はメンバーを組織し、結果的に深田淳太郎（主に第1, 2章を担当）、早川真悠（同、第4章）、高野さやか（同、5, 6章）、そして木村（同、序章、第3, 5, 6章）の4人が、日本語での出版への準備として訳稿を準備した。

宮崎さんは国立オーストラリア大学で博士号を取得後、コーネル大学で長く教鞭をとった後、現在はノースウェスタン大学人類学部で Kay Davis Professor を務める、世界的に著名な文化人類学者である。キャリアの初期にはフィジーでフィールドワークを行い、スヴァヴオウの人々とともに研究を行った。それと並行しつつ、本書にも書かれている通り、1990年代末頃からは市場や金融に関わる研究に着手し、日本の証券トレーダーとの対話と、かれらに関する省察をもとに、多くの刺激的な研究を発表してきた。また、宮崎さんは東京大学社会科学研究所で 2005 年に開始された「希望学」プロジェクトの主要なメンバーであり、そこでも重要な貢献をなしている。加えて 2010 年代以降、パートナーであるアナリス・ライルズさん（現・ノースウェスタン大ロベルタ・バフェット・グローバル研究所エグゼクティブ・ディレクター兼法学教授）とともに、meridian 180 という、東アジアの人文・社会科学の研究者や実務家が討論を行うプラットフォームの組織・運営を主導している。現在は、原爆が投下された地である広島を拠点に、日本人形を通じた日米間の交流について研究を進めている。

宮崎さんの最初の単著 *The Method of Hope: Anthropology, Philosophy, and Fijian Knowledge* (Stanford University Press, 2004、邦訳は『希望という方法』以文社、2007年)は、エルンスト・ブロッホの哲学を手掛かりに、フィジーの人々の、絶望の淵で自らの行為主体性を一時停止することによって、不確定なものとしての未来——希望——を招き入れるという「方法」を、エスノグラフィックに描き出したものである。同書は、対象となる人々の理解という点においてのみならず、その人々の方法を文化人類学の方法として「複製」するという方向性を示した点で、『文化を書く』[クリフォード&マーカス 1996]以降、他者表象の問題をずっと引きずっていた文化人類学において革新的であり、後続の研究者に多大なインスピレーションを与えた。

単著として2冊目となる本書は、1990年代末から足かけ10年以上にわたって宮崎さんが日本で行ったフィールドワークに基づく、ニュアンスと示唆に富むエスノグラフィである。ある書評が指摘するように、対象地域やテーマは大きく違うが、前著と本書の議論と響き合うところがある [Greenhouse 2016]。読者のうち、この時期を同時代的に経験している人ならば、第4章でふれられる「ホリエモン」や「村上ファンド」、あるいは「自己実現」や「勝ち組/負け組」など、見覚えのある名前や言葉を見つけ、親しみとある種のなつかしさを覚えるに違いない。日本語での読者にとって本書はまず、この時代——大まかには、バブル崩壊後のいわゆる「失われた20年」の中、経済の構造的な改革が求められ、長期にわたる小泉政権のもと、新自由主義的な政策・制度が導入されていく時代——についての、ユニークな日本社会論として読むことができるだろう。

また本書は、随所にちりばめられたマーケットに関わる専門用語、ソロスからテットに至る言及など、人類学とビジネスや金融のジャンルの間で巧みにバランスを取りつつ、読者を、予想を裏切るような展開、オリジナルな思考に誘う。そこで描かれる金融の専門家たちは、様々なジャンルの本を読み、スピリチュアリズムや UFO に熱中し、金融とは一見無関係な夢を熱く語る存在であり、さらにその多くは「失敗」し、金融業界から離れていく。本書は、(元)トレーダーたちの生きざまに伴走しながら、金融に関わる人類学[アパドゥライ 2020 など] や社会学・科学技術論に対しても新たな視点を提示し、またマリノフスキーやモースからはじまる経済人類学 [ハン&ハート 2017 など] の蓄積の位置づけ直しを行う。文化人類学においては、ある社会集団における、持続的に反復される儀礼や日常実践を対象とし、それを文化的社会的なコンテクストのもとで考察する、ということが従来のアプローチであった。そのため金融の世界に対しても、その内部の実践やロジックに目を向け、それがどのような文化的社会的コンテクストのもとにあるのかを議論することが多かった。それに対し本書では、時間の中で立場や発言が変化していく人々を通して、金融に関わる実践やロジックがむしろ、ある場(金融取引)を超えて拡張的に反復されていく身振りに目が向けられる。

その核心にあるのが、アービトラージ(裁定取引)だ。本書はトレーダーたちとともに、このアービトラージというものの持つ可能性を展開していく。アービトラージは、金融取引の手法ないし理念、彼らの(金融取引という場面を超えた)生き方、さらには、リスクでギャンブル的な「投機」に代わる、金融をイメージする際のオルタナティブなモデル、そして人類学的方法…というように、重層的な役割を果たす。「アービトラージする」ことは理論的な操作であり、また信じることである。その意味で、あらゆることはアービトラージだと言いうるし、逆にそもそもアービトラージなどない(あるかのようにふるまっているだけ)ともいえる。このように、ともすれば錯綜しがちな、重層的なアービトラージの議論を、本書は「ナボコフ的」[Greenhouse 2016]とも評される巧みな描き方で論じる。そこには、言説分析や統計的な一般性ではなく、ある特定の人々、その具体的な言動に着目し、かれらとともに考えることを通して社会を見る視角を得ようとする、現代社会を扱う文化人類学の手法のひとつのモデルを見いだすこともできるだろう。こうした、フィールドから見いだした「方法」のポテンシャルを拡張していく手つきは、読むものにきわめて示唆的である。

木村が特に惹かれたのもこの点、そして「終わり」への感受性であった。本書が公刊されたのは東日本大震災から 2 年後にあたる 2013 年である。木村は被災地で調査をするなかで、いつか来てしまう(が、来てほしくない)ものとしての「終わり」について語る被災者に強い印象を受けた。本書で描かれるトレーダーも、いずれ来てしまいうるアービトラージの機会の「終わり」を想定しながら(ただしそれは良いことでもある)、「失敗」しては場所を転じて進んでいく。その姿は、奇しくもその数年後に華々しく活躍した SEALDs が活動を終えるにあたって言った「しかし終わったというのなら、また始めましょう。始めるのは私であり、あなたです。何度でも反復しましょう」とも通じるものであった。

その一方で、原著の刊行から 10 年近くが経つ中で、日本社会においては別の時間性のモードが強まっているようにも見える。東日本大震災直後、これほどの大きな打撃を受けたのであれば、日本社会も変わらざるを得ないだろうと思われた。だが、そうした期待は次第に弱まっていき、むしろ、終わると思ったものが終わらないという時間性、変えられなさや終

えられなさという、諦めを含んだはかない明るみのなかで、私たちは生きてきたように思える。そして、この時間性は、発生から2年半が経つ現在も終息の見えないコロナ禍にも通じる。どんなアクションが、あるいはトランザクションが、「終わり」に近づく動きになるのだろうか？ しかしそもそも、もしこのパンデミックが、大きな意味での（つまり、人類にとっての）「終わり」に向かう気候変動のプロセスの帰結の一部であるのなら、私たちには何ができるのだろうか？ 私たちはむしろトレーダーたちよりもフィジーの人々の近くにいるのだろうか？

いま、私たちは、どのような存在に目を向け、その方法を自らのものとして「複製」するのか。本書の、一見アイロニカルに見えつつもけっして悲観的にはならない語り口に倣いながら、そうした問いについて考えてみるのが、本書の贈与へのリアクションとして、読者に委ねられていることであるだろう。

下訳者を代表して 木村周平

アパドゥライ、アルジュン 2020『不確実性の人類学——デリバティブ金融時代の言語の失敗』中川理・中空萌訳、以文社。

クリフォード、ジェイムズ & ジョージ・マーカス編『文化を書く』春日直樹ほか訳、紀伊国屋書店。

ハン、クリス & キース・ハート 2017『経済人類学——人間の経済に向けて』深田淳太郎・上村淳志訳、水声社。

Greenhouse, C. J. 2016 Arbitraging anthropology: Miyazaki on the ethnography of finance. *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)* 22: 207-9.